

ロシアの挑発をやめよ：西側は傲慢な酔漢の自信を捨てよ！

世界最大のガラガラヘビの謙虚な危機対処法に学べ

【訳者注】原題は Don't Push Russia, Hold my Beer and Watch This! となっている。これは解説を要するだろう。後半は慣用句で、「危険な、かつ/あるいは愚かなスタントをやってみせる前に言うキャッチフレーズ」と辞書に説明されている。酔っぱらいが酔った勢いで、危ないわざをやってみせることからきている。

これはこのサイトでも、最高というべきエッセー作品だろう (The Saker は常連寄稿者)。イースタン・ダイヤモンドバックというガラガラヘビの、敬意あふれる紹介が、まずそれ自体で読ませる。しかもそれが、賢明なプーチンのロシアの絶妙な比喻になっていて、彼らをこれでもかと挑発する (メイ首相のような) 傲慢な西側が、このフレーズを口にする、愚かな自信をもった酔っぱらいにたとえられている。この時勢を正確にとらえている人の文章は、その比喻も表現も正確で美しい。

The Saker

March 19, 2018, Information Clearing House

いよいよ追い詰められるか、攻撃されたとき、ロシアは強く反撃する——強く！ 恐ろしいのは、西側がそれを理解していないことだ。

ガラガラヘビは恐ろしい噂をもっている。私の住むここフロリダには、地上最大のガラガラヘビであるイースタン・ダイヤモンドバック (Crotalus adamanteus) が住んでいる。彼らは巨大で、長さは2メートルを超え、重さは15キロにもなる。イースタン・ダイヤモンドバックの毒は、毒蛇の最強のものではないが、大量に注射することができる。だから確かに、恐ろしい動物である。しかし、それはまた、おとなしい動物でもあり、非常に慎重な生き物である。

イースタン・ダイヤモンドバックはまた、驚くほど美しい動物である。白状すれば、私は断然、彼らが好きである。

嫌な奴という彼らの評判にもかかわらず、ダイヤモンドバックは、避けられる限り決して人を襲うことはない。私はハイキングの途中で、何度となく彼らに出会い、棒切れで彼らをよけたり、また私のジャーマン・シェパードが、(文字通り)鼻をくっつけるのを見たりしているが、ダイヤモンドバックが襲ったことはない。なぜか？ なぜなら、これらの蛇は、咬まねばならなくなる事態を避けるために、あらゆることをするからである。

まず初めに彼らは隠れる。それが実にうまい。大きなダイヤモンドバックのすぐ隣に立っていて、気づかないことがある。すぐ隣を通り過ぎても、それは動きもせず警告音も立てないので、そこにいたことに気づかない。カムフラージュが、彼らの最初の防衛線である。

次に、もし発見されれば、彼らは自分の尾をカタカタ言わせる。必要な場合は、非常に大きな音を立てる。あなたは5メートル先から、イースタン・ダイヤモンドバックの音を容易く聞くことができる。彼らを避けるには十分以上の距離である。

それだけでなく、機会があれば、イースタン・ダイヤモンドバックは退いて隠れるだろう。



最後に、いよいよ追い詰められれば、彼らの多くは“ドライ・バイト”と言われるものを試みる。すなわち咬みはするが、毒を出さないのである。なぜだろう？ 理由は、あなたが餌ではないからだ。餌でなければ、毒を出すことに何の意味があるのか？ イースタン・ダイヤモンドバックは、あなたを死なせたくない、あなたを生かしておきたいのである！

かつて、アリゾナの森林警備員から聞いた話がある。ガラガラヘビに咬まれて死ぬ典型的なタイプは——白人、男性、入れ墨をもつ、そして最後に、有名な、「おい見てろ、これはこ

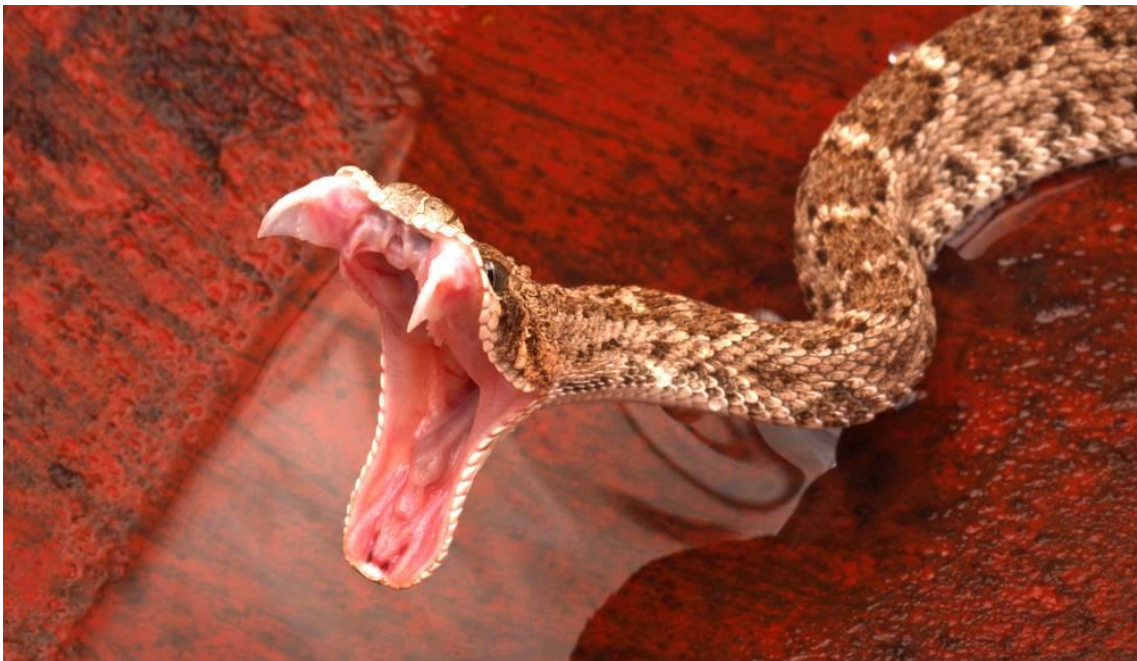
ういうふうにするんだ」というセリフを残す人物だという。

なぜ私はこんな話をしているのか？

なぜなら、これがまさに私の、恐れる目の前で起こっていることだからである。

ロシアはまさに、攻撃しなくてすむように、必死に、あらゆる手段を尽くしている、イースタン・ダイヤモンドバックである。西側は、酔っぱらいの愚か者で、侮りと傲慢に満ち、「見てろ、こうやってやるんだ」という、非常に間違った不死身の感覚をもっている。

忘れないでいただきたい。酔っぱらった人間と戦ったら、イースタン・ダイヤモンドバックは、ほとんど確実に生き残れない。彼らはそのことを知っていて、だからこそ、何よりも、そのような戦争を避けるために、あらゆる努力をしているのである。しかし、いよいよ追い詰められるか、攻撃されれば、ダイヤモンドバックは攻撃するだろう——強く。その攻撃がどのようなものかは、次の写真を見ていただきたい：——



あなたが、このような攻撃を受ける側に立ちたくないことは、ほとんど確実だろう！

しかしそれは、頭が正常で、しらふの人について言えることである。あなたが酔っぱらっているときには、あなたの態度は、「見てろ、こうするんだ」、この蛇の扱い方は知っているぞ、というものになる。

彼らは今、みんな、まさにその状態にある。メイ、トランプ、マクロン、メルケルはもちろんだが、彼らのサイコパス売春新聞 (presstitute) や、ゾンビ化された従僕の群れも同じだ。彼らはすべて、自分の不死身と優越を信じている。

恐ろしいのは、この者たちが、自分が誰を相手にしているのかを**全く知らず**、ロシアを追い詰めることの結果を理解していないことである。まあ、頭では知っているだろう (ナポレオンやヒトラーのことを我々は知っている)。しかし腹の底では、彼らは自分が安全で、優越していると思っている。そして、自分がまさか死ぬとは、この社会全体が消えてなくなるとは、考えられないのだ。

私は彼らに、次の点を注意深く考えてもらいたい。

最近のインタビューで、プーチンは、ロシアがアメリカに攻撃された場合、ロシアによる報復攻撃の正当性についてどのように考えるか、と訊ねられた。プーチンは次のように答えた――「確かに、人類にとって、それは地球的大破局でしょうね。世界にとって、それは地球の終わりでしょう。しかし、ロシアの一市民として、ロシア国の長として、私はこう尋ねる：――“もしロシアがなくなれば、我々が世界を持つ必要がどこにあるのだ？”と。」

https://lenta.ru/news/2018/03/07/big_boom/

そう、これがプーチンの口から出た、直接の真実である：――もし、アングロ・シオニストの計画が (世界と協力して) ロシアを――物理的にだろうと、別の方法だろうと――抹殺することであるなら、ロシア人民には、そんな世界を生かしておく意味がない、ということである。この言葉を、ロシア流ガラガラヘビの、非常に大きな、ほとんど絶望的な、警告音として聞いておくべきだ。

そして彼らが、一緒になって、ロシアをどこまで追い詰めても大丈夫なのか、試してみようとしているのを、考えてみよ。

私は、万事手遅れになる前に、そのロシアの警告音が十分に西側に届いて、彼らを思いとどまらせることができるか、否かを考えている。

どうなるか、私には予測できない。

――以上